

養護学校における「介護等体験」が 障害者に対する行動と気持ちに与える影響

三浦仁美* 佐野竹彦**
Hitomi MIURA Takehiko SANO

*名古屋市立春日野小学校

**障害児教育講座

「小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教育職員免許法の特例等に関する法律」(平成9年6月18日法律第90号, 以下, 「介護等体験特例法」と呼ぶ)が平成10年4月1日に施行され, 小学校又は中学校の教諭の普通免許状の授与を受けようとする者は, 障害者, 高齢者等に対する介護, 介助, これらの者との交流等の体験(以下, 「介護等体験」と呼ぶ)を行うことになった。介護等体験は, 盲学校, 聾学校若しくは養護学校又は社会福祉施設その他の施設で, 7日間行くと定められている(同法施行規則)。介護等体験の内容等については細かい規定がないために, 各大学・短期大学においてさまざまな試みがなされており, いくつかの報告が出されている。これらの報告のうち, 調査研究をみると, その調査対象は大学・短期大学, 受け入れ機関(特殊教育諸学校, 社会福祉施設等), 参加学生の3つに大別できる。

海老沢・徳田・埴(2001)は, 小・中学校の教職課程をもつ4年制大学に対する調査を行い, 回答の得られた140校について分析した。事前指導は96%の大学で実施されているのに対して, 事後指導を実施している大学は21%に過ぎなかった。事前指導の内容として, 「体験先での活動上の注意事項」を挙げる大学が97%と最も多かった。また, 事前指導の反省点として, 「学生の目的意識や心構えを促す指導に努めたい」というものが10%と最も多かった。さらに, 事後指導の内容として, 「障害者や高齢者に対する見方の変化」(79%), 「学生の体験内容」(79%), 「学生が体験を通して学んだこと」(76%), 「体験中に生じた疑問点」(72%)が多かった。

愛知教育大学教育実地研究委員会介護等体験実施検討部会(2002)は, 介護等体験の受け入れ側に対する調査を行い, 愛知県内の特殊教育諸学校13校, 社会福祉施設等67施設から回答を得た。介護等体験の実施により, 肯定的な変化がみられたと回答した機関は, 特殊教育諸学校では85%, 社会福祉施設等では76%であった。一方, 介護等体験を実施して問題点が生じたと回答した機関は, 特殊教育諸学校の77%, 社会福祉施設等の33%であった。

末澤・佐野・寄田(2000)は, 養護学校における介

護等体験に参加した学生に対して, 介護等体験後に調査を実施した。「どんな学習の機会になったか」という問に対する回答として, 障害児に対して抱いていた偏見を解消したというものが多かった。また, 介護等体験の前後での気持ちの変化をみると, 「義務づけられていないとしたら, 自主的に介護等体験を受けるか」という問に対して, 体験前は「体験しようと思わない」が71%であったが, 体験後は「体験しようと思う」が67%になっていた。介護等体験前には約90%の学生が介護等体験に対して不安を抱いているが, 介護等体験後では約60%の学生がその不安は解消した, と回答している。さらに, 介護等体験後, 「これから障害児に積極的に関わる機会を持とうと思う」と回答する学生は70%近かった。

高畑・若山・平野・小林・武蔵(2000), 若山・平野・高畑・小林・武蔵(2000)は, 附属養護学校で介護等体験を行う学生に対して, 事前調査(介護等体験第1日目朝の日程説明前)と事後調査(第2日目の反省会終了時)を実施した。事前調査において, 体験するに当たっての気持ちを尋ねたところ, 不安があると回答した学生は84.1%, 期待があると回答した学生は94.9%であった。不安があると回答した学生の中の69.7%が, 事後調査において不安が解消されたと回答していた。

久芳(2001)は, 介護等体験に参加した学生をボランティア活動の経験のある群(活動の対象は, 高齢者が46%, 障害児(者)が33%)と経験のない群とに分けて比較した。「体験以前にもっと知っておきたかったこと」という問に対して, 「体験先の情報」, 「具体的なかわり方」を挙げる学生の割合は, 経験のない群の方が多かった。「今後のボランティア活動について」という問に対して, 「またやってみたい」, 「別の活動をやってみたい」, 「大学でボランティア活動の情報提供があるとよい」と回答する割合は, 経験のある群の方が多かった。「体験中に困ったこと」という問に対する回答結果より, 経験のない者は基本的な接し方や理解で戸惑い, 経験のある者は適切な対応に苦慮する傾向がみられた。

本研究では, 養護学校における介護等体験に参加し

た学生を対象に、介護等体験で体験する可能性のある内容をいくつか設定し、学生がそれぞれの体験内容をどのぐらいの割合で体験しているかを明らかにしようとする。また、体験した学生については、その時、どのような気持ちを抱いたかについても明らかにしようとする。設定する体験内容は、子どもに関する項目、先生に関する項目、学校に関する項目で構成する。体験することによって、肯定的な気持ちを抱くと予想される項目と否定的な気持ちを抱くと予想される項目を用意する。体験した時に抱く気持ちを細やかに知るために、肯定的な気持ちを表す選択肢、否定的な気持ちを表す選択肢ともに複数用意し、複数回答を求めることにする。

介護等体験特例法によれば、介護等体験を実施する観点とは、「義務教育に従事する教員が個人の尊厳及び社会連帯の理念に関する認識を深めることの重要性に坎がみ、教員としての資質の向上を図り、義務教育の一層の充実を期する」(同法第1条)こととされている。したがって、介護等体験によって、障害児・者とより一層、適切で積極的な関わりができるようになることが期待される。本研究では、この期待が実現されているかどうかについて明らかにするために、障害者に関連する具体的な場面を設定し、そのような場面でのどのように行動し、どのような気持ちを抱くと思うかについて、学生に回答を求める。介護等体験の前後における行動と気持ちの主観的な変化についての回答を得て、変化の方向性を明らかにするとともに、どのような場面で主観的な変化が大きく、どのような場面で主観的な変化が小さいかを明らかにしようとする。また、介護等体験における体験内容が障害者に対する行動や気持ちの変化の有無に影響を与えるかどうかについても吟味する。

方 法

調査対象者

A大学の教員養成課程の1年生に在籍する学生で、A大学附属養護学校での介護等体験に参加した151名が本調査への回答に応じた。このうち、すべての項目に有効な回答をした111名(男31名、女80名)を分析対象とした。分析対象者の年齢は、18歳27名、19歳74名、20歳10名であった。分析対象者は全員、社会福祉施設等での介護等体験は未経験であった。

調査用紙

調査項目は、(1)年齢、性別等を尋ねるフェースシート項目、(2)養護学校における介護等体験での各体験内容の有無と、体験した場合の気持ちについての質問項目、介護等体験全体を通じての気持ちを尋ねる項目、(3)障害者に関連する日常場面に出会ったら、介護等体験の前にはどのように行動し、どのような気持ちを抱いたか、また、今後(介護等体験後)、どのように行動

し、どのような気持ちを抱くかについて尋ねる項目で構成した。

介護等体験における体験内容についての項目をTable 1に示した。実際の調査用紙では、項目1から項目11において、Table 1に示す文の末尾に「時があった」が付加されている。項目1-9は子どもに関する項目である。項目1, 2, 7は、子どもが学生に働きかける体験であり、項目3, 4, 8は、学生が子どもに働きかける体験である。また、項目5, 6, 9は、学生と子どもが相互に関わっている体験である。項目10-12は先生に関する項目である。項目13, 14は学校の雰囲気についての項目である。これらの項目のうち、項目1, 3, 5, 6, 7, 9, 10, 12, 13は、肯定的な気持ちを抱くと予想される体験内容であり、項目2, 4, 8, 11, 14は、否定的な気持ちを抱くと予想される項目である。

これらの項目について、体験したかどうかについて回答を求めた。体験したと回答した学生については、その時、どのような気持ちを抱いたかについて、Table 1に示す10個の気持ちの中から当てはまる気持ちを選択(複数回答可)するように求めた。肯定的な気持ちを表す選択肢として、「うれしかった」、「楽しかった」、「充実感を持った」、「感動した」を用意した。また、否定的な気持ちを表す選択肢として、「嫌だった」、「つまらなかった」、「困った」、「不安だった」を用意した。さらに、「何も感じなかった」、「その他」(具体的な記述を求める)も用意した。個々の体験内容についての質問の後、介護等体験全体を通じて抱いた気持ちについて質問した。用意した選択肢は、個々の体験内容についての質問の場合と同一であったが、ここでは、最も当てはまる気持ちを1個だけ回答するように求めた。

障害者に関連する日常場面の選定に当たっては、調査対象者と障害者との関わりが直接的か間接的か、また、直接的な関わりの場合、調査対象者にとって障害者が既知か未知かを考慮して、「車を駐車しようとして、車椅子専用の駐車スペースが空いているとしたら」、「駅で切符を買う時に、目の見えない人が切符売り場にいるとしたら」、「大学であなたと同じクラスに障害を持った学生がいるとしたら」、「障害者に対する偏見を持った話を友達がしているとしたら」、「障害者の施設や学校から、ボランティアのお願いをされたとしたら」、の5場面を用意した。以下の記述では、それぞれの場面を「駐車スペース」、「切符売り場」、「同級生」、「偏見」、「ボランティア」と略記する。これらの場面における選択肢として、行動、気持ちそれぞれ3個の選択肢を用意し、最も当てはまると思うものを1個選択するように求めた。選択肢は障害者に対して積極的と考えられるもの、消極的と考えられるもの、およびその中間と考えられるものを用意した。以後、各々

Table 1 体験者率と気持ち選択者率 (%)

項 目	体験者率	気持ち選択者率				
		うれしかった	楽しかった	充実感を持った	感動した	何も感じなかった
1. 子どもの伝えたいことがわかった	90.1	81.0	34.0	25.0	24.0	6.0
2. 子どもの伝えたいことがわからなかった	95.5	0.9	0.0	0.9	0.9	1.9
3. 子どもにあなたの言いたいことが伝わった	91.0	81.2	15.8	30.7	25.7	1.0
4. 子どもにあなたの言いたいことが伝わらなかった	91.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.0
5. あなたとのやりとりで、子どもが楽しんでいると感じた	92.8	82.5	59.2	37.9	24.3	1.0
6. 子どもと一緒に何かができたと感じた	81.1	66.7	47.8	45.6	32.2	1.1
7. 子どもから話しかけてきたり、誘ってきたりした	90.1	90.0	32.0	19.0	29.0	0.0
8. あなたから話しかけたり、誘ったりした時に、子どもがこたえてくれない	88.3	2.0	0.0	0.0	0.0	3.1
9. 子どもと体を通して触れ合っていると感じる	82.0	56.0	48.4	46.2	25.3	1.1
10. 先生の子どもへの接し方が尊敬できると感じる	95.5	2.8	2.8	10.4	73.6	8.5
11. 先生の子どもへの接し方が適切でないと感じる	18.0	0.0	0.0	0.0	0.0	10.0
12. あなたにいろいろな話をしてくれたり、あなたの質問に答えてくれたりする先生がいた	61.3	61.8	11.8	29.4	16.2	7.4
13. 学校の雰囲気全体としてよいと感じた	100.0	10.8	28.8	20.7	36.9	16.2
14. 学校の雰囲気全体としてよくないと感じた	1.8	0.0	0.0	0.0	50.0	50.0
特殊教育諸学校での介護等体験全体では、あなたはどのような気持ちを持ちましたか	—	3.6	32.4	44.1	13.5	0.9

項 目	気持ち選択者率				
	嫌だった	つまらなかった	困った	不安だった	その他
1. 子どもの伝えたいことがわかった	3.0	1.0	3.0	2.0	1.0
2. 子どもの伝えたいことがわからなかった	10.4	100.0	83.0	48.1	2.8
3. 子どもにあなたの言いたいことが伝わった	0.0	0.0	2.0	0.0	1.0
4. 子どもにあなたの言いたいことが伝わらなかった	8.9	0.0	83.2	32.7	5.0
5. あなたとのやりとりで、子どもが楽しんでいると感じた	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0
6. 子どもと一緒に何かができたと感じた	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
7. 子どもから話しかけてきたり、誘ってきたりした	0.0	1.0	1.0	1.0	1.0
8. あなたから話しかけたり、誘ったりした時に、子どもがこたえてくれない	7.1	4.1	66.3	38.8	13.3
9. 子どもと体を通して触れ合っていると感じる	0.0	0.0	1.1	1.1	2.2
10. 先生の子どもへの接し方が尊敬できると感じる	0.0	0.0	0.0	0.0	10.4
11. 先生の子どもへの接し方が適切でないと感じる	30.0	0.0	25.0	40.0	5.0
12. あなたにいろいろな話をしてくれたり、あなたの質問に答えてくれたりする先生がいた	0.0	0.0	0.0	0.0	4.4
13. 学校の雰囲気が全体としてよいと感じた	0.0	0.0	0.0	0.0	3.6
14. 学校の雰囲気が全体としてよくないと感じた	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
特殊教育諸学校での介護等体験全体では、あなたはどのような気持ちを持ちましたか	0.0	0.0	1.8	1.8	1.8

Table 2 障害者に関する場面の選択肢

項 目	選択肢	行 動	気 持 ち
1. 駐車スペース	消極	車椅子専用の駐車スペースに車をとめる	車椅子の人のことを考える必要はない
	中間	空いているところがなければ、車椅子専用の駐車スペースに車をとめる	少しぐらいならかまわない
	積極	車椅子専用の駐車スペースには車をとめない	車椅子専用の駐車スペースは車椅子の人のためのものだ
2. 切符売り場	消極	通り過ぎる	関わりたくない
	中間	見守る	誰かが助けるだろう
	積極	声をかける	力になりたい
3. 同級生	消極	避ける	関わりたくない
	中間	学校でだけ接する	誰かが仲良くするだろう
	積極	学校以外でも学校でと変わらず接する	仲良くしたい
4. 偏見	消極	話に加わる	障害者に対する偏見は間違っているとは言い切れない
	中間	話を聞いているだけ	障害者に対する偏見があるのは仕方がない
	積極	偏見がなくなるように話をする	障害者に対する偏見をなくしたい
5. ボランティア	消極	ボランティアへ行かない	関わりたくない
	中間		誰かが行くだろう
	積極	ボランティアへ行く	ボランティアをしてみたい

の選択肢を「積極」、「消極」、「中間」と略記する。ただし、「ボランティア」の場面の行動については、「積極」、「消極」の2つの選択肢しか用意しなかった。各場面の選択肢を Table 2 に示す。

手続

大学で実施された介護等体験の事後指導の終了後に調査への回答を依頼し、協力の得られた学生に調査用紙を配布し、回答を求めた。回答は無記名とした。

結 果

介護等体験において、各体験内容を体験した者の割合（体験者率）を Table 1 に示した。子どもに関する体験（項目 1-9）の体験者率は90%代が6項目、80%代が3項目であり、すべての項目で体験者率は高かった。しかし、「6. 子どもと一緒に何かができたと感じた」（81.1%）、「9. 子どもと体を通して触れ合っていると感じた」（82.0%）は他の項目に比べて体験者率はやや低かった。

先生に関する体験（項目10-12）では、肯定的な体験と考えられる「10. 先生の子どもへの接し方が尊敬できると感じた」の体験者率は95.6%と高く、否定的な体験と考えられる「11. 先生の子どもへの接し方が適切でないと感じた」の体験者率は18.0%と低かった。先生との肯定的な体験と考えられる「12. あなたにいろいろな話をしてくれたり、あなたの質問に答えてくれたりする先生がいた」の体験者率は61.3%であり、肯定的と考えられる他の体験（子どもに関する体験、先生に関する体験）の体験者率よりも低かった。

学校の雰囲気については、全員が「13. 学校の雰囲気

が全体としてよいと感じた」に「はい」と回答している。全調査対象者の1.8%は、「14. 学校の雰囲気が全体としてよくないと感じた」にも「はい」と回答している。

各項目について、体験者のうち、それぞれの気持ちを選択した者の割合（気持ち選択者率）を Table 1 に示した。子どもが学生に働きかける体験のうち、肯定的な気持ちを抱くであろうと予想した項目 1, 7 では、ともに「うれしかった」（項目 1：81.0%、項目 7：90.0%）を選択した者が一番多かった。子どもが学生に働きかける体験のうち、否定的な気持ちを抱くであろうと予想した項目（項目 2）では、全員が「つまらなかった」を選択しており、ついで「困った」を選択した者が83.0%と多かった。

学生が子どもに働きかける体験のうち、肯定的な気持ちを抱くであろうと予想した項目（項目 3）では、「うれしかった」（81.0%）が一番多かった。学生が子どもに働きかける体験のうち、否定的な気持ちを抱くであろうと予想した項目（項目 4, 8）では、ともに「困った」（項目 4：83.2%、項目 8：68.3%）が一番多かった。

学生と子どもが相互に関わって、肯定的な気持ちを抱くであろうと予想した項目 5, 6, 9 では、3項目とも「うれしかった」（項目 5：82.5%、項目 6：66.7%、項目 9：56.0%）が一番多く、「楽しかった」（項目 5：59.2%、項目 6：47.8%、項目 9：48.4%）がこれに続いていた。また、「充実感を持った」（項目 5：37.9%、項目 6：45.6%、項目 9：46.2%）を選択した者の割合も多かった。

Table 3 気持ち数の度数分布 (%)

項 目	気持ち数			
	0	1	2	3 以上
1. 子どもの伝えたいことがわかった	0.0	51.0	27.0	22.0
2. 子どもの伝えたいことがわからなかった	0.0	58.5	35.8	5.7
3. 子どもにあなたの言いたいことが伝わった	0.0	64.4	16.8	18.8
4. 子どもにあなたの言いたいことが伝わらなかった	0.0	72.3	22.8	5.0
5. あなたとのやりとりで、子どもが楽しんでいると感じた	0.0	38.8	31.1	30.1
6. 子どもと一緒に何かができたと感じた	2.2	45.6	21.1	31.1
7. 子どもから話しかけてきたり、誘ってきたりした	0.0	55.0	26.0	19.0
8. あなたから話しかけたり、誘ったりした時に、子どもがこたえてくれない	0.0	71.4	22.4	6.1
9. 子どもと体を通して触れ合っていると感じる	0.0	58.2	14.3	27.5
10. 先生の子どもへの接し方が尊敬できると感じる	0.0	93.4	5.7	0.9
11. 先生の子どもへの接し方が適切でないと感じる	0.0	90.0	10.0	0.0
12. あなたにいろいろな話をしてくれたり、あなたの質問に答えてくれたりする先生がいた	0.0	79.4	14.7	5.9
13. 学校の雰囲気が全体としてよいと感じた	0.9	86.5	9.9	2.7
14. 学校の雰囲気が全体としてよくないと感じた	0.0	100.0	0.0	0.0

先生に関する体験のうち、「10. 先生の子どもへの接し方が尊敬できると感じた」では、「感動した」(73.6%)が一番多かった。「11. 先生の子どもへの接し方が適切でないと感じた」では、「不安だった」(40.0%)、「嫌だった」(30.0%)、「困った」(25.0%)に分散していた。「12. あなたにいろいろな話をしてくれたり、あなたの質問に答えてくれたりする先生がいた」では、「うれしかった」(61.8%)が一番多く、「充実感を持った」(29.4%)がこれに続いていた。

学校の雰囲気にについての体験である「13. 学校の雰囲気が全体としてよいと感じた」では、「感動した」(36.9%)、「楽しかった」(28.8%)、「充実感を持った」(20.7%)に分散していた。「14. 学校の雰囲気が全体としてよくないと感じた」については、「はい」と回答した者が少なかったため、分析の対象から除外する。

介護等体験全体で抱いた気持ち(1個選択)では、「充実感を持った」(44.1%)、「楽しかった」(32.4%)が多かった。否定的な気持ちを抱いた者は3.6%とわずかであった。

各項目について、各体験者が選択した気持ちの数の度数分布を示したのがTable 3である。子どもに関する項目についてみると、学生が子どもに働きかけて否定的な気持ちを抱く2つの体験(項目4, 8)では、気持ちを1個選んでいる者が70%を越えており、他の項目に比べて多かった。一方、学生と子どもが相互に関わって肯定的な気持ちを抱く体験(項目5, 6, 9)においては、3個以上の気持ちを選んだ者の割合は30%前後であり、他の項目に比べて多かった。また、項目5, 6は1個の気持ちを選んだ者は40%前後であり、他の項目に比べて少なかった。先生に関する体験

と学校の雰囲気については、どの項目も1個を選んだ者の割合が多かった。

障害者に関連する場面での行動と気持ちを介護等体験の前後別にまとめたのがTable 4である。3個の選択肢が用意されている項目1から項目4について、行動の結果をみていく。「消極」を選んだ者の割合は、体験前の「2. 切符売り場」の27.9%を除けば、すべて10%以下であった。項目1, 2, 3, 4ともに、体験前に比べて体験後では「中間」を選んだ者の割合が減少し、「積極」を選んだ者の割合が増大しているが、変化の大きい項目と小さい項目がある。「1. 駐車スペース」と「3. 同級生」は、体験前において、すでに「積極」を選んだ者の割合が多く、変化は少ない。一方、「2. 切符売り場」と「4. 偏見」は体験後になると、「積極」を選ぶ者の割合が大幅に増えている。「中間」の選択肢のない「5. ボランティア」も体験前に比べて、体験後は「積極」を選んだ者の割合が大幅に増えている。

気持ちについての結果は、行動についての結果と類似している。「消極」を選んだ者の割合は全般に少ないが、「4. 偏見」では10%を越えており、他の項目に比べて多い。5項目すべてにおいて、体験前に比べて体験後では「中間」を選んだ者の割合が減少し、「積極」を選んだ者の割合が増大しているが、変化の大きい項目と小さい項目がある。「1. 駐車スペース」と「3. 同級生」は、体験前において、すでに「積極」を選んだ者の割合が多く、変化は少ない。一方、「2. 切符売り場」、「4. 偏見」、「5. ボランティア」は体験後になると、「積極」を選ぶ者の割合が大幅に増えている。

行動と気持ちの関連を明らかにするために、行動よ

Table 4 行動と気持ちの関連 (%)

項 目	時期	行 動			気持ち数		
		消極	中間	積極	消極	中間	積極
1. 駐車スペース	前	2.7	18.0	79.3	0.9	16.2	82.9
	後	0.0	8.1	91.9	0.0	5.4	94.6
2. 切符売り場	前	27.9	51.4	20.7	4.5	41.4	54.1
	後	6.3	35.1	58.6	0.0	11.7	88.3
3. 同級生	前	6.3	33.3	60.4	4.5	25.2	70.3
	後	0.9	23.4	75.7	0.0	12.6	87.4
4. 偏見	前	4.5	66.7	28.8	14.4	43.2	42.3
	後	3.6	36.9	59.5	13.5	15.3	71.2
5. ボランティア	前	58.6	—	41.4	9.0	54.1	36.9
	後	30.6	—	69.4	0.0	27.0	73.0

りも気持ちの方が消極的な回答をしている者（たとえば、行動の設問に対する回答が「積極」で、気持ちの設問に対する回答が「中間」の者）、行動と気持ちが同じ者（たとえば、行動、気持ちの設問に対する回答がともに「中間」の者）、行動よりも気持ちの方が積極的な者（たとえば、行動の設問に対する回答が「中間」で、気持ちに対する回答が「積極」の者）の割合を算出した。その結果が Table 5 である。「5. ボランティア」は、行動の選択肢に「中間」がないので、この分析の対象から除外した。「1. 駐車スペース」と「3. 同級生」は、行動と気持ちが同じ者の割合が多かった。「2. 切符売り場」と「4. 偏見」は、行動と気持ちと同じ者の割合が多いものの、気持ちの方が積極的な者の割合は、「1. 駐車スペース」、「3. 同級生」よりも多かった。特に、「2. 切符売り場」の体験前では、気持ちの方が積極的な者の割合は56.8%と高率になっている。

体験前から体験後への変化についてまとめた結果が Table 6 である。行動、気持ちともにすべての項目において、消極的な方向への変化をした者（たとえば、体験前では「積極」を選択し、体験後は「中間」を選択した者）はほとんどいなかった。「1. 駐車スペース」と「3. 同級生」は類似した結果を示しており、変化なしの者の割合が行動、気持ちともに80%以上と多かった。「2. 切符売り場」、「4. 偏見」、「5. ボランティア」は、積極的な方向への変化を示した者（たとえば、体験前では「中間」を選択し、体験後は「積極」を選択した者）の割合は、「1. 駐車スペース」、「3. 同級生」に比べて多かった。

介護等体験での体験内容が障害者に関連する場面での行動や気持ちに影響を与えるか否かを吟味するために、以下の分析を行った。まず、子どもに関する体験（項目1から項目9）について、各調査対象者が肯定的な気持ちを抱いた項目数（肯定的気持ち体験数）と否定的な気持ちを抱いた項目数（否定的気持ち体験数）を求めた。なお、ある場面で肯定的な気持ち、あるいは

Table 5 気持ち数の度数分布 (%)

項 目	時期	気持ちの方が		
		消極的	同じ	積極的
1. 駐車スペース	前	0.0	94.6	5.4
	後	0.9	95.5	3.6
2. 切符売り場	前	0.9	42.3	56.8
	後	0.0	64.9	35.1
3. 同級生	前	5.4	77.5	17.1
	後	2.7	82.9	14.4
4. 偏見	前	17.1	61.3	21.6
	後	18.0	60.4	21.6

Table 6 前後での変化 (%)

項 目		変化の方向		
		消極的	無変化	積極的
1. 駐車スペース	行動	0.9	96.4	2.7
	気持ち	0.0	88.3	11.7
2. 切符売り場	行動	0.0	50.5	49.5
	気持ち	0.0	64.0	36.0
3. 同級生	行動	0.0	82.0	18.0
	気持ち	0.0	81.1	18.9
4. 偏見	行動	0.9	68.5	30.6
	気持ち	5.4	64.0	30.6
5. ボランティア	行動	0.0	72.1	27.9
	気持ち	0.0	60.4	39.6

は否定的な気持ちを複数選択していても、肯定的気持ち体験数、あるいは否定的気持ち体験数は1とみなした。次に、障害者に関連する各項目について、体験前の回答と体験後の回答のすべての組み合わせについて、該当する調査対象者数を求めた。さらに、この人数が5名以上の組み合わせについて、肯定的気持ち体験数と否定的気持ち体験数の平均と標準偏差を求めた。最後に、体験前で同一の選択肢を選び、体験後には異なる選択肢を選んだグループ間の平均の差の有意

性の有無をt検定(2グループの場合)、あるいは分散分析(3グループの場合)によって検定した。その結果がTable 7である。たとえば、「1. 駐車スペース」で体験前、体験後ともに「中間」を選んだ者は6名いて、肯定的気持ち体験数の平均は5.17であり、体験前は「中間」を選び、体験後は「積極」を選んだ者は14名いて、その平均は5.21である。この2グループの平

均間には、有意差はみられない。

肯定的気持ち体験数についてみる。「2. 切符売り場」で体験前に行動で「中間」と回答した者では、体験後も回答に変化がなかった群よりも積極的な方向に変化した群の方が平均は有意に高かった。「4. 偏見」においても、体験前に行動で「中間」と回答した者では、体験後も回答に変化がなかった群よりも積極的な方向

Table 7 前後での回答の組み合わせ別 体験気持ち数

項 目		介護等 体験前	肯定的気持ち体験数 介護等体験後				否定的気持ち体験数 介護等体験後			
			消極	中間	積極	検定結果	消極	中間	積極	検定結果
1. 駐車スペース	行動	中間	人数	6	14		6	14		
			平均	5.17	5.21	n.s.	1.83	2.86		△
			標準偏差	1.17	1.42		0.75	1.10		
	気持ち	中間	人数	6	12		6	12		
			平均	5.17	5.33	n.s.	2.17	3.00		n.s.
			標準偏差	1.17	1.15		0.98	1.04		
2. 切符売り場	行動	消極	人数	7	13	11	7	13	11	
			平均	4.14	4.62	5.45	2.14	2.38	2.45	n.s.
			標準偏差	1.86	1.45	0.93	1.21	0.96	0.69	
	行動	中間	人数		26	31		26	31	
			平均		4.77	5.65		2.58	2.84	n.s.
			標準偏差		1.73	0.75		0.86	0.69	
	気持ち	中間	人数	11		35	11		35	
			平均	4.36	5.17	n.s.	2.45	2.60	n.s.	
			標準偏差	1.57	1.42		1.04	0.81		
3. 同級生	行動	中間	人数	23	14		23	14		
			平均	4.78	5.21	n.s.	2.57	2.50		n.s.
			標準偏差	1.20	1.25		0.95	0.76		
	気持ち	中間	人数	12	16		12	16		
			平均	5.08	4.94	n.s.	2.33	3.00		△
			標準偏差	1.62	1.34		1.07	0.63		
4. 偏見	行動	中間	人数	41	32		41	32		
			平均	4.78	5.34	△	2.71	2.78	n.s.	
			標準偏差	1.42	1.41		0.93	0.49		
	気持ち	消極	人数	10		6	10		6	
			平均	4.50		5.67	2.60		2.33	n.s.
			標準偏差	1.58		1.03	1.35		0.82	
	気持ち	中間	人数	16		28			16	28
			平均	4.81	5.21	n.s.	2.69	2.57	n.s.	
			標準偏差	1.68	1.03		0.95	0.74		
5. ボランティア	行動	消極	人数	34	31		34	31		
			平均	4.53	5.39	*	2.59	2.74	n.s.	
			標準偏差	1.71	1.12		0.96	0.73		
	気持ち	中間	人数	26	34		26	34		
			平均	4.81	5.35	n.s.	2.58	2.82	n.s.	
			標準偏差	1.63	1.25		1.10	0.67		

△p<.10 *p<.05

に変化した群の方が平均は有意に近く高かった。平均の数値だけでみると、比較可能な12対のうち、積極的な変化を示した群の方が高い対が11個、変化のない群の方が高い対が1個であった。

否定的気持ち体験数についてみる。「1. 駐車スペース」で体験前に行動で「中間」と回答した者では、体験後も回答に変化がなかった群よりも積極的な方向に変化した群の方が平均は有意に近く高かった。「3. 同級生」においても、体験前に気持ちで「中間」と回答した者では、体験後も回答に変化がなかった群よりも積極的な方向に変化した群の方が平均は有意に近く高かった。平均の数値だけでみると、比較可能な12対のうち、積極的な変化を示した群の方が高い対が9個、変化のない群の方が高い対が3個であった。

考 察

本研究では、介護等体験において子どもと関わる体験内容を9項目用意した。体験者率は最低の項目でも81.1%であり、ほとんどの学生が子どもと関わって、肯定的な気持ちを抱く体験も否定的な気持ちを抱く体験もしていることが明らかになった。本研究で言う「否定的な気持ちを抱く」体験とは、子どもとの意思疎通や関わりがうまく行かなかった体験であり、子どもに対して否定的な気持ちを抱いたことを意味している訳ではない。子どもが学生に働きかける体験や学生が子どもに働きかける体験に比べて、学生と子どもが相互に関わる体験の体験者率はやや低かった。これは、養護学校における介護等体験の期間が2日間と短く、学生が子どもと深く関わる機会が少なかったことが原因と考えられる。

ほとんどの調査対象者は、先生の子どもへの接し方が尊敬できると感じており、子どもへの接し方が適切でないと感じた者はわずかであった。また、全員が学校の雰囲気は全体としてよいと感じている。さらに、介護等体験全体で抱いた気持ちに対する回答では、否定的な気持ちを抱いた者はほとんどいなかった。これらの結果より、調査対象者は、概ね介護等体験先の学校や先生に対して、良好な印象を持ったと考えられる。しかし、先生と話したり、先生に質問した調査対象者は61.3%と比較的少なかった。この少なさの一因も介護等体験の期間の短さにあると考えられる。

子どもに関する体験で肯定的な気持ちを抱く場合、「うれしかった」が最も多く選択されている。同じく肯定的な気持ちを抱く体験でも、学生と子どもが相互に関わる体験では「充実感を持った」を選択する者が相対的に多い。また、学生と子どもが相互に関わる体験では、選択する気持ちの数は他の体験よりも多い。これらの結果より、学生と子どもが相互に関わる体験は、他の体験に比べてより豊かな体験であると言える。子どもとの関わりがうまくできなかった体験では、

「困った」という困惑の気持ちを抱く者が多かった。

先生や学校に対して肯定的な気持ちを抱いた場合「感動した」が最も多く選択されている。一方、先生に否定的な気持ちを抱いた場合、選択される気持ちは分散しており、また、抱いた気持ち数は1個が多い。これは、先生に対して否定的な気持ちを抱く場面が多様なことを予想させる。また、学生が先生と関わることでできた場合には、学生と子どもが相互に関わる体験と同様に「うれしかった」が最も多く選択され、「充実感を持った」も多く選択されている。相手が子どもであろうと先生であろうと、他者と相互に関わることでできた場合、「うれしかった」や「充実感を持った」といった気持ちが抱かれやすいと考えられる。

障害者に関連する場面での行動と気持ちについての結果より、おおまかに見て「1. 駐車スペース」と「3. 同級生」が類似しており、また、「2. 切符売り場」、「4. 偏見」、「5. ボランティア」が類似していると言える。行動、気持ちともにすべての項目において、介護等体験前に比べて介護等体験後では「中間」が減り、「積極」が増えている。しかし、前後での変化の大きさをみると、「1. 駐車スペース」と「3. 同級生」は介護等体験前において、すでに「積極」を選択している者の割合が多く、変化は小さい。一方、「2. 切符売り場」、「4. 偏見」、「5. ボランティア」では介護等体験後になると、「積極」を選択する者が大幅に増えている。行動よりも気持ちの方が積極的な者の割合は、「1. 駐車スペース」、「3. 同級生」よりも「2. 切符売り場」、「4. 偏見」の方が多い。

介護等体験前から介護等体験後への回答の変化のパターンを見ると、行動、気持ちともにすべての項目において、消極的な方向へ変化する者はわずかであった。この結果より、介護等体験が学生に対して好ましくない影響を与える可能性は少ないと考えられる。「1. 駐車スペース」、「3. 同級生」は変化しない者の割合が多いのに対して、「2. 切符売り場」、「4. 偏見」、「5. ボランティア」は、積極的な方向に変化する者の割合が多い。「1. 駐車スペース」、「3. 同級生」において、積極的な方向へ変化した者が少なかったのは、介護等体験前において、すでに積極的な回答をしている者が多いために、積極的な方向へ変化の可能性が少ないことによるのであろう。

「2. 切符売り場」、「3. 同級生」、「5. ボランティア」は、いずれも障害者と直接、関わるか否か、関わるとすれば、どのように関わるのか、についての回答を求めている。「3. 同級生」のように、既知の障害者に対しては、介護等体験前ですでに、積極的な関わりをすると回答する者が多い。一方、「2. 切符売り場」や「5. ボランティア」のように、未知の障害者に対しては、介護等体験前では、気持ちの面では積極的であっても、その気持ちを行動として外に出せないと

思っている者が多い。介護等体験を経て、行動面でも積極的になれる者が多いと言える。

「1. 駐車スペース」は、直接、障害者と関わらなくても積極的な行動がとれる場面であるので、介護等体験前でも積極的な行動をすると回答した者が多いのであろう。これに対して、「4. 偏見」は、積極的な障害観がないと積極的な行動がとれない場面であるために、介護等体験前では、積極的な行動がとれる者が少なかったのであろう。障害児と関わる体験をして障害観がある程度、確立した者は、積極的な行動をとれるようになったと考えられる。

介護等体験の前後で変化のなかった群よりも介護等体験後に積極的な方向へ変化した群の方が、介護等体験において肯定的な気持ちを抱く体験も否定的な気持ちを抱く体験もより多く体験している傾向がみられた。これは、子どもとの関わりをより多く体験した方が、障害者に対して、より積極的な方向へ変化する可能性が多いことを示している。

本研究では、介護等体験後に、主観的な変化の有無を尋ねた。介護等体験前と介護等体験後に同一の調査を実施するという調査方法も必要である。また、本研究では、介護等体験先の受け入れ状況などの要因も吟味していない。これらの点について、今後、検討する必要がある。

要 約

養護学校における介護等体験が障害者に対する行動や気持ちに与える影響について明らかにするために、介護等体験に参加した大学生111名に調査を実施した。子どもと関わる体験では、肯定的な気持ちを抱く体験でも否定的な気持ちを抱く体験でも体験者率は80%を越えており、ほとんどの学生が子どもと関わっていた。

学生と子どもが相互に関わる体験や学生と先生が相互に関わる体験をした者の割合は、他の体験に比べて低かった。これは、介護等体験の期間の短さが一因と考えられる。子どもや先生と相互に関わる体験をすると、他の体験に比べてより豊かな感情を持つと考えられる。

介護等体験に参加することによって、未知の障害者と積極的に関わろうとする方向へ意識が変化する学生が多かった。また、積極的な障害観が確立していく傾向もみられた。介護等体験において、より多く子どもと関わった学生ほど、障害者に関連する場面で積極的になる傾向がみられた。

文 献

- 愛知教育大学教育実地研究委員会介護等体験実施検討部会
2002 介護等体験の教育効果に関する実証的研究 一地域社会とのより深い連携を目指して一
- 海老沢千冬・徳田克己・堀和明 2001 大学における事前・事後指導実施の実態と今後の展望 日本特殊教育学会第39回大会発表論文集
- 久芳美恵子 2001 特殊教育諸学校での介護等体験における大学生の意識 ボランティア活動の経験との関連 日本特殊教育学会第39回大会発表論文集
- 末澤清・佐野好久・寄田啓夫 2000 教員養成における養護学校での「介護等体験」の意義に関する一考察 一香川大学教育学部附属養護学校における平成11年度の実践から一 香川大学教育実践総合研究, 1, 89-98.
- 高畑庄蔵・若山美津彦・平野隆志・小林真・武蔵博文 2000 知的障害養護学校での介護等体験に関する調査研究：調査概要及び事前指導のあり方 富山大学教育学部研究論集, 3, 45-54.
- 若山美津彦・平野隆志・高畑庄蔵・小林真・武蔵博文 2000 知的障害養護学校における介護等体験に対する学生の意識調査 富山大学教育実践総合センター紀要, 1, 45-50.
- (平成15年9月3日受理)